

二つの川尻中学校

《資料①》

平成二十二年八月、呉市立川尻中学校の中庭からは、もう一つの川尻中学校がその姿を消そうとしていた。四つの校舎には足場が生まれ、シヨベルカ^{じん}ーが大きな音をたてて校舎を壊し、粉塵を抑えるために消防用ホースで水がまかれ、砕かれたコンクリートや鉄筋をダンプカーが運び出す…猛暑日が続く中、連日の解体工事が続けられていた。



「ただいま。」

バスケットの練習を終え、^{あかね}明音が帰ってきた。

「新チームはどう？」

自分自身も同校のバスケット部のキャプテンをしていた母の美恵子は声をかけた。

「チームワークもいいと思うよ。でも、練習の最後にはいつも顧問の先生の指示で校舎の床の雑巾がけ…。あんなにきれいな校舎をさらにきれいにしてどうするんじゃない？」

「顧問の先生も色々考えているはずよ。」

「顧問の先生からは事あるごとに『君達はバスケットだけをしに来てるんじゃない。』って、言われるの。」



解体工事のために足場が組まれた
川尻中学校旧校舎玄関



川尻中学校新校舎玄関

《資料②》

夕食を終え父の秀司しゅうじは、妻と娘をウォーキングに誘った。

しばらく歩くと川尻中学校の新校舎が見えてきた。秀司はつぶやいた。

「すごい学校が建ったよな。こんな校舎で毎日暮らす明音は幸せ者だよ。」

そんな秀司のつぶやきを聞いて、美恵子は、

「参観日のときに中に入れてもらってたけど、木がふんだんに使われていて、気持ちのいい校舎よね。でも、こんなに素敵な校舎なんだけど、やっぱり私の中では川尻中学校じゃないのよね。」

「そういえば、俺たちの頃は呉市じゃなくて豊田郡だったよな。豊田郡川尻町立川尻中学校……、なんだか懐かしい響きだよな。」

「いま壊しているところ、三年C組じゃない？ 私たちが一緒のクラスになった最初で最後の三Cよ。」

「えっ、お父さんとお母さんって同じクラスだったの？」

「あ那时的担任の先生、とつても怖かったよなあ。藤岡先生だったわけ。」

「何言ってるのよ。藤岡先生じゃなくて、藤原先生でしょう。あなた、豊田郡の『郡』を『群れ』って書いて高校の入学願書、書き直しになったわよね。」

「あの後、また同じ失敗しちゃって……先生に言えずに職員室の前をうろろしてたよな。あの先生、元気にしてるかなあ。」

「それにしても、あ那时的クラスの、楽しかったわよね。体育大会ではあと一点で優勝を逃したけど、合唱コンクールで一番になって、

総合文化行事の連合音楽会に出たわよね。あ、

あの渡り廊下にみんな並んで合唱の朝練習したじゃない。」

「あの渡り廊下……、明日にもなくなりそうだな……。」

「そういえば、クラスのみんなで埋めたタイムカプセルはどこだったわけ……。」

旧校舎を見ると次々に思い出がよみがえってくる両親の会話を聞きながら、明音は、目の前に立っている新校舎を、今までとは違った気持ちで見つめていた。ヒグラシの鳴き声を聞きながら三人はまた歩き始めた。



川尻中学校旧校舎の渡り廊下